中高生を対象とした施設紹介＜施設の概要＞

文京区青少年プラザ b-lab

1　施設概要

開　　館　平成 27 年 4 月　（文京区教育センターに併設）
平成 21 年　「(仮称) 青少年プラザ」設置を計画
平成 22 年　「教育センター等建物基本プラン検討委員会」設置
平成 22 年～ 24 年　中高生にアンケートとヒアリングを実施
平成 25 年　青少年プラザ条例制定
平成 26 年　公募型プロポーザル方式で、運営業務委託事業者を「認定非営利活動法人カタリバ」に決定

開館時間　午前 9 時から午後 9 時まで（中学生の利用は午後 8 時まで）

休 館 日　年末年始、保守点検日（年 1 回程度）

対　　象　文京区在住、在学の中学生・高校生世代（在勤も含む）　利用者登録必要

主な施設　談話スペース、勉強スペース、多目的スペース、音楽スタジオ、ホール、プレイヤード

利用料金　中高生は無料（ホール、音楽スタジオは区内在住・在勤・在学の大人は有料での予約利用可能）

施設URL　http://b-lab.tokyo/（Twitter、LINE あり）

所　　管　文京区教育委員会教育推進部児童青少年課

勉強スペース（パソコン、iPad 貸出あり、館内 Wi-Fi あり）

2　主な事業

- 施設の貸出
- 文化・スポーツ事業（中高生が興味を持つ様々な分野の講座）
- 学習支援事業（各種講座や学習支援イベント「マナビ場」等）
- 利用者会議、地域交流事業（中高生企画）等

調布市青少年ステーションＣＡＰＳ

1　施設概要

開　　館　平成 15 年　「中学生・高校生世代向け児童館」として開館
市内には他に児童館が 11 館、中高生対象の児童館はＣＡＰＳのみ
平成 19 年　NPO 法人ちょうふこどもネットが受託運営

開館時間　午前 10 時から午後 8 時まで

休 館 日　第 2・4 月曜日、年末年始

対　　象　市内の中学校・高等学校に在学、又は在住、在勤している人　利用者登録必要

主な施設　ロビー、音楽スタジオ、ダンススタジオ、クラフトルーム（絵具・工具等）、会議室、スポーツエリア（屋上のバスケット、バレー、サッカーができるコート）、観戦エリア（卓球、ダーツ等あり）、相談室

利用料金　無料

施設URL　http://www.chofu-caps.net/（Twitter あり）

所　　管　調布市 子ども生活部　児童青少年課

ダンススタジオ

2　主な事業

- 施設の貸出
- イベント等の開催（音楽、ダンス、クラフト、スポーツ、ＩＴ、サブカルチャー（ゲーム等）、学習）
- サークルの運営（ソーラン節同好会・軽音部等）
- 季節イベントの実施
- 地域交流（地域イベントへの出店・出演、児童館への出張講座等）

中高生を対象とした施設紹介

文京区青少年プラザ b-lab 白田館長にインタビュー

・施設のコンセプトが「中高生の秘密基地」ですが、運営方針を教えてください。

文京区の中学生・高校生が、放課後や休日を自由に過ごすことができる場所として、①「何かやってみようかな」を応援する②様々な人との関わりから社会性を育む③地域の中の自分を自覚するという三つの方針を達成するために、「居場所」と「ステージ」をキーワードとして運営しています。

白田館長（左）
話している高校生は、中学校で実施した「出張 b-lab」でこの施設を知り、年に数回利用しているそうです。

・どのように施設を周知し、中高生が利用していますか。

広報誌（フリーペーパー「Cha! Cha! Cha!」）を区内在学の全中高生に年２回配布しているほか、区内中学校・高校に、生徒向け広報誌「b-lab たより」及び教員向け広報誌「b-lab 通信」をそれぞれ隔月配布しています。また、区立中学校を対象に、キャリア学習支援事業「出張 b-lab」も行っています。そのような周知を行っている一方で、７、８割の利用者は友達に誘われて来館しています。年間で約 28,000 人の中高生が利用しています。

・施設を利用する中高生が、事業（プロジェクト）を企画する側になるきっかけは

何かやってみたい、という中高生を常時公募しており。現在は約 40 名の中高生が、20 ほどのプロジェクト（イベントを企画運営する、プログラミングでゲームを作る等）に取り組んでいます。プロジェクトは一人でも実施可能で、スタッフが利用者の内発的な動機に寄り添い、背中を押すことで動き出す子供たちが多いです。その後もスタッフが一緒に参加することで、挑戦をサポートしています。主体的にやってみたい、と思ったことを実現し、次のアクションにつなげていく連鎖をつくることを意識しています。

・様々な出会いやきっかけがある、ということですね。

b-lab で過ごすうちに世界が広がる利用者がいます。例えば、インターネットを使うために来ていた高校生は、日々 b-lab で過ごす中で、ギターを弾く子、ダンスをする子など、いろいろなことに挑戦する利用者を見てきました。そしてある日、職員に「人と議論するイベントをやってみたいんだよね。」とつぶやきました。その一言を職員がすかさず拾い、サポートできる大学生とつなげ、実際にイベントを実現させました。このことを通して、彼の b-lab 利用の幅は、ゲームをすることに加え、他の世界につながったのです。小さなつぶやきから広げていく、そのタイミングを見極めることが、職員の専門性として重要なポイントかもしれません。

・恒例のイベントでも、中高生が他の世界とつながる企画がありますか。

例年 12 月に開催している「冬フェス」では、ライブや自作ゲーム体験会等の中高生企画のほかに、今年度は来場した大人やスタッフも参加する全員企画を開催しました。初めて会う３名でチームをつくり、自己紹介をする時間を入れ、様々な人との出会いの場とすることができました。

また、中高生のプロジェクト発表会「b-lab　award」は、今回は１１組が発表しました。「活動を通して誰かを happy にできたか」という視点を盛り込んだ発表を行い、中高生がプロジェクトを企画・実施した思いを互いに伝え合うことができました。

冬フェス 2019　ロビーで開催した全員企画

・中高生を支えるために大切なことはなんですか。

「自分が動いても社会は変わらない」と思い、社会と関わることを躊躇（ちゅうちょ）する中高生が増えています。だからこそ、この b-lab で、「自分が関わることで、まずは半径５m を変えられる。」という経験をしてほしいと思っています。

中高生は、安心できる「居場所」と、自ら行動してみる「ステージ」の間を行き来しながら成長していきますが、その動きをスタッフが見極め、支えるということが大切です。大学生・若手社会人のスタッフ（フロアキャスト）をはじめとした多様な支援者が、自身のスキルを生かし、中高生の多様性を受け止め、成長に伴走します。

信頼できる誰かがたくさんいる社会をつくっていく、その１つとして、中高生の居場所施設が必要だと思います。

中高生を対象とした施設紹介

調布市青少年ステーションＣＡＰＳ　平澤館長と北村主任にインタビュー

・施設の特徴を教えてください。

家庭や学校ではない「いばしょ」であることとして、①安全安心に過ごすことができる「居場所」、②活動（音楽、ダンス、クラフト、スポーツ、サブカルチャー等）ができる「活場所」、③自主的にイベントを企画・運営できる「生場所」をコンセプトとして運営しています。

音楽担当やスポーツ担当、ＩＴ担当等、専門的な知識をもつスタッフが活動をサポートしていることが特徴です。

北村主任（左）、平澤館長（右）

・利用者は、近隣の中高生が多いですか。

１日の平均利用者数は約 80 名ですが、自転車で 20 分圏内に市立・私立中学校３校、都立・私立高校が４校、都立特別支援学校が１校あり、利用者の７、８割がこの近隣校の生徒です。目的があって来館していなくても、ロビーでギターをひく、数人でゲームをする、そして何もしなくても居ることができる場所として、自由に過ごしています。

・中高生と接している中で感じることはなんですか。

学校と家庭以外の居場所が少ないと感じています。学校では生徒、家庭では長男等という与えられた役割から離れ、素の自分でいられる場所が必要だと思っています。また、職員から本人が関心ある分野への挑戦を提案しても、「どうせできないからやらない。」という答えが返ってくることが多く、失敗を経験できる場、そして挑戦を面白がれる場も少ないと感じています。

・実際に、中高生が挑戦した事例をご紹介いただけますでしょうか。

昨年の１２月に、ゲームのイベントを開催しましたが、このイベントを企画したのは中学生です。彼はゲームが得意で、ほぼゲームをしに来館していましたが、ある時、館内のイベント企画募集の掲示や、他のイベントを準備する利用者の様子を見たのでしょう、スタッフに企画を申し出ました。館で用意している企画書のフォーマットを渡して作成してもらい、スタッフと一緒に当日までの準備物等を確認しながら進め、実施することができました。しかし、勝ち抜け方式だったため、最初に負けた参加者が楽しそうではなかったことに、彼が気づいたんですね。急遽彼から相談があり、翌日も対戦形式を変えて開催することにしました。クチコミですが、初日より多い参加者がありました。他の人の気持ちに気づき、企画を考え直し、実施するという経験となり、最後の挨拶も堂々としたものでした。

・そのように中高生に寄り添うスタッフはどのような方たちですか。

特に資格は問わず、様々な体験や職業を経験しているスタッフ、年齢も幅広いスタッフがいます。中高生の時にＣＡＰＳでひたすらダンスをしていたダンス担当のスタッフもいます。誰かがいつもいる場所として中高生と接していますので、毎日の朝会では、常勤・非常勤・アルバイト全てのスタッフで、前日の利用者の様子を共有します。

一人一人を大事にした寄り添い方も重要だと思っています。先に紹介したゲームイベントを企画した中学生には、まず企画書を渡し、彼が作ってきた企画書をもとにスタッフと一緒に作り上げていきましたが、企画書をつくる段階から、スタッフが伴走することもあります。この寄り添い方も、スタッフで話し合いながら進めていきます。

また、臨床心理士がいることも重要なポイントです。利用者との対応についてスタッフが臨床心理士と相談できることで、自信を持って次の対応に生かすことができています。

中高生が企画に参加しているコンサートイベント

・地域とのつながりはありますか。

「調布市子ども・若者支援地域ネットワーク」に参加し、学校、児童相談所、児童福祉施設、警察等を含めて、包括的に地域の子供たちの様子を共有しています。このことにより、ＣＡＰＳでは対応が難しい中高生を、適切な場所につなげることができています。

また、お祭りに出店する等、地域に出ていくことは、中高生の体験活動の場としての意味もありますが、地域の方や保護者にこの施設を知っていただく機会としても位置付けています。

２　とうきょうの地域教育バックナンバーURL
https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/sesaku/mishou.html